

今日はII列王記8章から「神に従う幸い」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 神に従う幸い 1-6

1-6【1 エリシャは、かつて子どもを生き返らせてやったあの女に言った。「あなたは家族の者たちと一緒にここを去り、とどまりたいところに、しばらく寄留していなさい。主が飢饉を起こされたので、この国は七年間、飢えに見舞われるから。」2 この女は神の人のことばにしたがって出発し、家族を連れてペリシテ人の地に行き、七年間滞在した。3 七年たった後、彼女はペリシテ人の地から戻って来て、自分の家と畑を得ようと王に訴え出た。4 そのころ、王は神の人に仕える若者ゲハジに、「エリシャが行った大いなるわざを、残らず私に聞かせてくれ」と話していた。5 彼が王に、死人を生き返らせたあの出来事を話していると、ちょうどそこに、子どもを生き返らせてもらった女が、自分の家と畑のことについて王に訴えに来た。ゲハジは言った。「王様、これがその女です。そしてこれが、エリシャが生き返らせた子どもです。」6 王が彼女に尋ねると、彼女は王にそのことを話した。すると王は彼女のために、一人の宦官に「彼女のすべての物と、彼女がこの地を離れた日から今日までの畑の収穫のすべてを、返してやりなさい」と命じたのであった。】

この箇所は時間的には4章と5章の間に入ります。というのは、エリシャに仕えるゲハジは、まだ5章でのツアラアトに冒される前の出来事だからです。4章でエリシャが自分に良くしてくれる裕福な女の子どもを生き返らせる奇跡を行いました。その後しばらくして、エリシャはその女に「この国は7年間飢饉に見舞われるので、家族とともにここを立ち去り、とどまりたい所に寄留しなさい」と告げました。女は神の人エリシャのことばに従って、家族を連れてペリシテ人の地に行き、7年間滞在しました。そして7年後シュネムの自宅に戻ってみると、自分の家と畑は他の人の所有となっていたのです。彼女は驚いたことでしょう。エリシャのことばに従った結果、家と畑を失うという災難にあってしまったのです。しかし、彼女はめげることなく、自分の家と畑を取り戻すために王に訴えに行きました。

一方その頃、王はエリシャに仕える若者ゲハジを呼び、「エリシャが行った大いなるわざを、残らず私に聞かせてくれ」と話していました。この時の王はヨラムでした。彼はエリシャの行いに興味を持っていたのです。ゲハジが王に死人を生き返らせた奇跡を話していると、ちょうどそこに女が王に訴えるためにやって来ました。ゲハジはすかさず「王様、これがその女で、この子がエリシャが生き返らせた子です」と言いました。彼女は王にそのことを話しました。その話は王の心に感動を与えたようです。王はその場で宦官を呼び、「彼女のすべての物と、彼女がこの地を離れた日から今日までの畑の収穫のすべてを、返してやりなさい」と命じ、彼女は再び自分の家と畑、さらに今までの畑の収穫分まで得ることになったのです。

第一の点で覚えたいことは、神に従う幸いについてです。預言者エリシャのことばは、神がエリシャに与えられたことばであり、それは神のことばです。彼女は神のことばに従って、7年間ペリシテ人の地に寄留しました。しかし、7年後帰ってみると、家も畑も他の人の物となっていました。神に従った結果、家も畑も失うという理不尽な状況になってしまったのです。しかし、それで終りませんでした。女は王に訴えに行きました。すると何というタイミングでしょうか。その時ゲハジは王に、子どもを生き返らせたエリシャの奇跡を話していたのです。王は生き返った子どもを見、直接女からも話を聞き、家も畑もその間の収穫物も女に返しました。伝道3:11の「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」というみことばが実現しました。神はご自分に従う者を見捨てることなく、必ず良くしてください。ローマ8:28には「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人たちのためには、すべてのことが共に働いて益となることを、私たちは知っています。」とあります。時間も人との出会いも様々な出来事も、すべてのことを神の御手の中で共に働き、益としてくださいます。そのことを覚えて、私たちも神を愛し、神に従う者となりましょう。

2. 預言者の涙 7-15

7-10【7 さて、エリシャがダマスコに行ったとき、アラムの王ベン・ハダドは病気であった。すると彼に「神の人がここまで来ている」という知らせがあった。8 王はハザエルに言った。「贈り物を持って行って、神の人を迎え、私のこの病気が治るかどうか、あの人を通して主のみこころを求めてくれ。」9 そこで、ハザエルはダマスコのあらゆる良い物をらくだ四十頭に載せて、贈り物として携え、神の人を迎えに行った。彼は神の人の前に来て立ち、こう言った。「あなたの子、アラムの王ベン・ハダドが、『この病気は治るであろうか』と言って、あなたのところへ私を遣わしました。」10 エリシャは彼に言った。「行って、『あなたは必ず治る』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」】

エリシャはなぜアラムの首都ダマスコに行ったのでしょうか。それはI列王記19:15の主がエリヤに語られたことばに理由があります。主はエリヤに「さあ、ダマスコの荒野に帰って行け。そこに行き、ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ」と言われました。この時主はエリヤに「エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ」とも言われ、エリヤはエリシャを預言者として任命しました。エリシャは主がエリヤに語られたことを実現させるために、ダマスコに行きました。その時アラムの王ベン・ハダドは病気でした。ベン・ハダドはエリシャがダマスコにきていると聞くと、自分に仕えるハザエルに「贈り物を持って、神の人を迎え、自分の病気が治るかどうか、主のみこころを求めてくれ」と頼んだのです。王はエリシャの評判を聞いていたのでしょう。彼は主なる神を信じていたわけではありませんが、自分の病気が治るかどうか知りたいと、わらをもすがる思いでエリシャに聞いたのです。

ハザエルはさっそくらくだ40頭の贈り物を携えて、エリシャの所に行きました。そしてエリシャに「あなたの子、アラムの王ベン・ハダドが、『この病気は治るであろうか』と言って、あなたのところへ私を遣わしました」と言いました。あなたの子とは謙遜な言い方です。それに対してエリシャは言いました。「行って、『あなたは必ず治る』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」これはどういうことでしょうか。まずベン・ハダドの病気は治る病気だということです。けれども彼は病気以外の理由で必ず死ぬということです。エリシャのこの意味ありげな言葉は、ハザエルの心の中にある自分が王になりたいという野心を探ったのではないのでしょうか。

11-15【11 神の人は、彼が恥じるほどじっと彼を見つめ、そして泣き出したので、12 ハザエルは尋ねた。「ご主人様はなぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエル人に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたはイスラエル人の要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八つ裂きにし、妊婦たちを切り裂くだろう。」13 ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんな大それたことができるでしょう。」しかし、エリシャは言った。「主は私に、あ

あなたがアラムの王になると示されたのだ。」14 彼はエリシャのもとを去り、自分の主君のところに帰った。王が彼に、「エリシャはあなたに何と言ったか」と尋ねると、彼は「あなたは必ず治ると言いました」と答えた。15 しかし、翌日、ハザエルは厚い布を取って水に浸し、王の顔にかぶせたので、王は死んだ。こうして、ハザエルは彼に代わって王となった。】

エリシャはハザエルが恥じるほどじっと見つめて、泣き出しました。ハザエルが「ご主人様はなぜ泣くのですか」と尋ねると、エリシャは「私は、あなたがやがてイスラエルを攻め、人々を虐殺することを知っているからだ」と答えました。ハザエルは「こんなに小さなしもべが、どうしてそんな大それたことができるでしょう」と言うと、エリシャは言いました。「主は私に、あなたがアラムの王になると示されたのだ。」エリシャの預言はまず、Ⅱ列王記10:32、33のハザエルのイスラエル攻撃によって成就します。そしてもう一つはハザエルが王のもとに戻った時に成就しました。王はハザエルにエリシャが何と言ったかと尋ねると、「あなたは必ず治ると言いました」と答えました。しかし、翌日ハザエルは厚い布を水に浸し、王の顔にかぶせて、王を殺し、ハザエルがベン・ハダドに代わって王となったことによって成就しました。

第2の点で覚えたいことは預言者エリシャの涙についてです。彼はやがてハザエルが王になると、イスラエルを攻撃し、領土を奪い、人々を虐殺することを主から示されて、ハザエルを見つめて泣きました。エリシャは、この出来事は、主なる神を信じず、偶像を礼拝し、悪を行うイスラエルに対する神のさばきであることを知っていました。それでも、同胞イスラエルを憐れんで泣いたのです。このエリシャの涙は、イエスの涙に通じます。ルカ19:41-44には、イエスがエルサレムに入城された時に、エルサレムを見て泣かれた出来事が記されています。なぜイエスが泣かれたかという、その週の金曜日にご自分を十字架に付けて殺してしまう人々の不信仰の結果、やがてエルサレムは神のさばきを受けて滅んでしまうことを知っておられたからです。イエスは、エルサレムとイスラエルの人々のことを憐れんで泣かれたのです。このことは70年にローマ軍がエルサレムを攻撃し、神殿をはじめすべての物が破壊され、多くの人々が死に、生き残った人は捕虜となって連れて行かれたことによって成就しました。エリシャの涙もイエスの涙も、自分の民を愛するゆえの涙です。ヨハネ3:16にはこうあります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」神の願いは「一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つ」ことです。そのために私たちを愛する神は、ご自分の愛するひとり子イエスを私たちの救い主としてお与えくださったことを覚えましょう。

3. 一つの罪の結果 16-29

16-24【16 イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年、ヨシャファテがまだユダの王であったとき、ユダの王ヨシャファテの子ヨラムが王として治めるようになった。17 彼は三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。18 彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻だったからである。彼は主の目に悪であることを行なった。19 しかし、主はそのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まなかった。主はダビデとその子孫に常にともしびを与えるに彼に約束されたからである。20 ヨラムの時代に、エドムが背いてユダの支配から脱し、自分たちの上に王を立てた。21 ヨラムは、すべての戦車を率いてツァイルへ渡って行き、夜襲を試みて、彼を包囲していたエドムと戦車隊長たちを討った。ところが、ヨラムの兵たちは自分たちの天幕に逃げ帰った。22 エドムは背いてユダの支配から脱した。今日もそうである。リブナもそのときに背こうとした。23 ヨラムについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、それは『ユダの王の歴代誌』に確かに記されている。24 ヨラムは先祖とともに眠りにつき、先祖とともにダビデの町に葬られた。彼の子アハズヤが代わって王となった。】

この箇所はユダの王についてです。イスラエルとユダの王の名前が同じヨラムなので、混乱しないように気を付けなければなりません。ユダの王となったヨラムは、主なる神を信じるヨシャファテの子です。ところがヨシャファテとは違い、ヨラムは主の目に悪であることを行いました。その理由はヨラムの妻はアハブの娘だったからです。彼女の名前は26節を見るとアタルヤであることがわかります。アハブは自分の妻イゼベルとともにバアル礼拝を行ったイスラエルの王です。どうしてヨラムがアハブの娘と結婚したかという、父のヨシャファテが、イスラエルと友好関係を結んでいたからです。ヨシャファテは主を信じつつ、イスラエルとの友好関係を保つために、自分の息子がバアル礼拝をするアハブの娘と結婚することを許したのです。その結果は、ユダにもバアル礼拝が持ち込まれることになったのです。ヨラムの時代、エドムとリブナがユダに背き、ユダの支配から脱しました。

25-29【25 イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年に、ユダの王ヨラムの子アハズヤが王となった。26 アハズヤは二十二歳で王となり、エルサレムで一年間、王であった。彼の母の名はアタルヤといい、イスラエルの王オムリの孫娘であった。27 彼はアハブの家の道に歩み、アハブの家に倣って主の目の前に悪であることを行なった。彼自身、アハブ家の婿だったからである。28 彼はアハブの子ヨラムとともに、アラムの王ハザエルと戦うため、ラモテ・ギルアデに行った。アラム人はヨラムを討った。29 ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにラマでアラム人に負わされた傷を癒やすため、イズレエルに帰った。ユダの王ヨラムの子アハズヤは、アハブの子ヨラムが弱っていたので、彼を見舞いにイズレエルに下って行った。】

ユダの王ヨラムが死ぬと、彼の子のアハズヤが王となりました。彼の母はイスラエルの王オムリの孫娘、すなわちアハブの娘、父ヨラムの妻アタルヤです。この母の影響によって、アハズヤもバアル礼拝を行い、主の目の前に悪を行いました。イスラエルとユダの友好関係は続き、イスラエルの王ヨラムとユダの王アハズヤは共に、アラムの王ハザエルと戦いました。イスラエルの王ヨラムが負傷し、イズレエルに帰ると、ユダの王アザルヤは見舞いに行きました。次の9章ではそこで二人は殺されるのです。

第3の点で覚えたいことは、一つの罪の結果についてです。主のみこころにかなわない一つの罪が、その後大きな影響を及ぼすことがあるのです。バアル礼拝をするアハブの娘をヨラムがめとった結果、ユダもバアル礼拝を行うという、国家的な罪を犯すことになったのです。私たちも信仰生活において、自分の罪に気を付けなければなりません。ヘブル12:1にはこうあります。「私たちも一切の重荷とまわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競争を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。」罪は私たちにまわりついて来ます。ですからその罪をないがしろにせず、その都度、一つ一つの罪を捨て、すなわち罪の悔い改めをすることです。イエスの十字架を仰ぎ、神の赦しをいただきながら、信仰生活を歩むのです。私たちもイエスの十字架の贖いを信じ、一つ一つの罪を悔い改めながら、信仰の競争を忍耐をもって走り続けましょう。